

toyama design wave

富山で生まれる、次のデザイン。

2018

toyama design wave

富山で生まれる、次のデザイン。

富山から世界へ発信するデザインムーブメント

近年、人々の価値観やライフスタイルが多様化し、ものづくりには、高い機能性や低コストに加え、生活に潤いやぬくもりを与える優れたデザインが求められるようになってきています。

このため、富山県では、デザインの振興に早くから着目し、総合デザインセンターを中心に、デザイン性に優れた商品の共同開発や販路開拓の支援、デザイン人材の育成など、幅広い取り組みを進めてまいりました。

なかでも、このデザインウエーブ事業は、「富山から世界に発信するデザインムーブメント」として平成2年に開始し、今回で29回目を迎えました。優秀な作品の商品化を支援する「富山デザインコンペティション」を核とし、ワークショップ、展示会など、多彩な企画を実施しており、平成21年には産業活性化を目的としたデザインイベントとして、グッドデザイン賞を受賞するなど、全国的にも高い評価をいただいています。

今回の「富山デザインコンペティション」では、「素材と加工とデザイン—この先にあるプロダクト」をテーマに作品を募集したところ、県内外から様々な素材（紙、木材、繊維、樹脂、ガラス、金属等）の新たな魅力や価値を創造し、人々にデザインで感動を与える作品228点の応募をいただきました。10月には公開審査会を行い、この中から「とやまデザイン賞」等を決定したところです。

このデザインウエーブが、ご参加いただいた皆様にとって、デザインの新たな方向性を見出すきっかけになるとともに、デザインの振興、ひいては産業の発展に大きく貢献することを心から期待しています。

デザインウエーブ開催委員会 会長 石井 隆一

TOYAMA DESIGN WAVE 2018

CONTENTS

- 03 デザインコンペティション
富山デザインコンペティション2018
「素材と加工とデザイン—この先にあるプロダクト」
- 11 富山デザインコンペティション25周年特別展
- 18 Interior Lifestyle TOKYO 2018
- 19 ワークショップ
富山マテリアルワークショップ2018
「存在し続けるマテリアル」
- 23 デザインツアー
とやまD'DAYSツアー
- 25 イベント
富山県内のデザイン関連イベント
工芸都市高岡2018クラフト展
富山デザインフェア2018
第58回富山県デザイン展
高岡クラフト市場街
ミラレ金屋町
銅器団地オープンファクトリー
日本遺産サミットin高岡



テーマ

素材と加工とデザイン— この先にあるプロダクト

多くの先進デザイナーが取り組んできたテーマ「素材とデザイン」。例えば、紙や金属等のシート材(板材)において、素材を「切断する」から、「折る・曲げる」、「積層する・プレス成形する」といった技術の変遷とともに、新たなデザインやプロダクトが生まれ、人々に驚きや感動を与えてきました。ライフスタイルが日々進展するなか、素材や加工技術についても視点を変えて発想すれば、さらに想像を超えるデザインや、機能を併せ持った新たなプロダクトが生まれるのではないのでしょうか？

今年で25周年を迎えた富山デザインコンペティションでは、様々な素材(紙、木材、繊維、樹脂、ガラス、金属等)の新たな魅力や価値を創造し、人々にデザインで感動を生むようなプロダクトを募集しました。

TOYAMA DESIGN

COMPETITION 2018

富山デザインコンペティション2018

SCHEDULE

- 1 4月27日~7月2日
応募登録、作品シート受付(応募作品228点)
- 2 7月13日
1次審査
応募された作品シートの中から、1次審査通過作品12点を決定。審査結果はウェブサイトで発表。1次審査通過者には、2次審査用の模型制作のために5万円を支援。また模型制作のアドバイスや協力企業の紹介などを実施。
- 3 10月3日
2次審査・授賞式・意見交換会
2次審査に進んだ12組のデザイナーによる模型を使ったプレゼンテーションが行われ、公開審査によって各賞を決定。授賞式後、参加したデザイナーと審査員、企業との意見交換会が開催された。
- 4 10月4日~9日
富山デザインウェブ2018デザイン展
1次審査通過12作品の模型、作品シートを展示。
(会場:富山県民会館)
- 5 12月~
商品化支援
入賞作品のブラッシュアップとともに、提出作品の商品化に向けて県内企業とのマッチングやコラボレーション、販売開拓を支援。



全国で初めて「商品化」を支援するコンペとしてスタートし、これまで35点以上の商品を世に送り出し、その中からいくつかのヒット商品が生まれてきました。

10月3日(水)、228点の応募作品の中から選定された12作品のプレゼンテーションと2次審査が富山県民会館で開催され、多くの来場者を集めました。

〔審査評価基準〕

- 独創性** 斬新で、デザイナーの個性が反映されたものであるか。
- 市場ニーズ** 今の時代に適合し、市場が求めているものであるか。
- 美的価値** 造形として美しいものであるか。
- 商品化の可能性** 製造方法が現実的なものであるか。

〔審査員〕

- 安積 伸** プロダクトデザイナー／法政大学教授
- 川上 典李子** デザインジャーナリスト
- 鈴木 マサル** テキスタイルデザイナー／東京造形大学教授
- 岡 雄一郎** 富山県総合デザインセンタープロジェクトリーダー



ARMADILLO (アルマジロ)

インテリアに馴染む美しいダンベルです。掴む、腕に通す、足にかける等のウェイトトレーニングを行うことができます。また、起き上がり小法師のように自立します。鏡面仕上げとサンドブラスト加工を組み合わせることで、シルジーン青銅の二つの表情が楽しめます。また、使い込んでいくほどに色合いが濃く、独特の味わいが出てきます。使っている時はアクセサリのように、使わない時は彫刻のように、あなたの時間を彩ります。



阿部 憲嗣

東京を拠点とするプロダクトデザイナーです。精密機器メーカーでのデザインや、個人制作を行っています。1990年神奈川県生まれ。多摩美術大学生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻卒業。KAGOSHIMA DESIGN AWARD 2013、Wallpaper graduate-directory 2014、LOFT & Fab Award 2017 GOLD賞受賞。



Colonia (コロニア)

古来より、多方面で使われて来た松脂と現代的な素材であるメラミンスポンジの双方の特性を利用し、浸透させ形を生み出す新しいプロセスによるプロダクト。多くのデザインされた商品が出回り、オリジナリティのある製品が生み出されることが難しくなっている現代に、昔からの素材と現在の素材を掛け合わせ、人がコントロールできる部分とできない部分によるディテールが個性として存在するデザインを目指しました。



松下 陽亮

武蔵野美術大学工業デザイン学科在学中。実験的なアプローチを重視しながら、素材に向き合い、空間の中における物の在り方を考え、デザインしています。デザインを通して、生活の中に新しい気づきやポジティブな感情が生まれたら幸いです。



actex (アクテックス)

『actex』は機能と装飾性を併せ持った新しい青竹踏みです。素材、加工法、デザインの共通項となるテクスチャーに着目し、日常使いから仕事場まで幅広く使うことができます。足に対して各一個ずつ分けられ、マグネットでつく工夫は、より新しい環境と使いかたを促します。色を組み合わせることでプレゼントするのも少し楽しくなるかもしれません。



yonanp

2人のデザイナーによるデザインユニット、ヨナンペ。金沢美術工芸大学卒業後、2013年より活動開始。Toyama Product Design Competition 2014 とやまデザイン賞 商品化。h concept DESIGN COMPETITION 2017 優秀賞・審査員特別賞。他受賞、商品化多数。

fog (フォグ)



ガラス計量器の内側のみにフロスト加工を施すことで、曇りが晴れます。「計る」という行為の中で、数値のみで読み取るのではなく、水などの液体の質感を視覚的に体感でき、ガラスならではの加工技術と素材感を楽しみながら使う事のできる計量器です。



デザインスタジオ Bouillon

2016年愛知県を拠点にデザインスタジオ Bouillon を設立。素材それぞれの良さを「うまみ」と捉え、うまみの効いたデザインを国内外で発表している。メーカー及びブランドの製品開発をはじめ、職人と協力しものづくりの根底に関わる仕組みづくりなどの実験的な取り組みにも参加し、精力的に活動中。

富山ガチャ



富山の名産品を、伝統工芸の鋳造でフィギュアに加工し、ガチャにしました。富山には鋳造という素晴らしい技術がありますが、日常で目にする機会はそう多くありません。その技術に気軽に触れてもらいたいという思いで考えました。鋳は水の浄化作用がある為、置物としては勿論、花瓶に入れるなど日常でも利用できます。また、鋳加工を通じて富山のユニークな名産品を紹介するプラットフォームとしても活用できると考えます。



urucu

アートディレクターと経営コンサルタントがタッグを組んだユニットです。「デザインで人を笑顔に」をコンセプトに2018年より活動開始。



Sayou (サヨウ)



現在オブラートは薬を飲むという本来の使用法のほかにも、「オブアート」のような新たな使用方法が注目されています。しかし描くことに時間がかかること、適切な使用方法でなければ口にバサつきは残りせつかくの料理体験が満足できないなどといった問題点があります。そのためパターンをオブラートに可食印刷することで、薬を飲む経験に彩りを与えるだけでなく、菓子や料理に適切に美しくデコレーションできる、食べる行為全てに作用するシートを製作しました。

酒井 波奈

1994年高知県生まれ。京都工芸繊維大学造形工学課程卒業、同大学院デザイン学専攻在籍。デザイン方法論とプロダクトデザインを学んでいます。



Vivasket (ヴィバスケット)



乾漆の製法を応用したバスケット。一般的にはベルトとして使用されているPPベルトを樹脂で積層して素材を形成。樹脂を接着材の代わりとし、PPの繊維の間に入り込ませ強度を持たせています。乾漆の麻材の特徴である繊維に漆がしみこまないと生まれる強度を今回PPシートに応用しました。また、表面には樹脂材は塗っておらず積層する内側のみに樹脂を塗ることで普段親しみなれているPPの質感をそのままに新たなプロダクトへの発展ができるのではないかと考えました。

佐々木 健五

1986年香川県生まれ。多摩美術大学プロダクトデザイン専攻卒業後、京都と福岡にて指物と木工家具の職人修行。2014年から倉本仁主催のJIN KURAMOTO STUDIOにてデザイン修行中。



床のたんこぶ



『床のたんこぶ』は、柔らかなシリコン素材のドアストッパーです。従来のドアストッパーにはない弾力が、ドアと床への密着性を高め、意外と煩わしかったドアの固定が、簡単にスムーズに行えます。『床のたんこぶ』の中央部を軽く踏んで、ドアを挟み込んでください。足を外すと、「ピタッ」とドアを固定してくれます。ポコッとした可愛いシンプルな形状は、場所を選ばず、様々なシーンに対応します。



中嶋 尚孝

福岡デザイン専門学校専任教員。Design ship TORA主宰。

verto (ベルト)



『verto』はネジをモチーフにした手回し式のフラワーベース。独立した螺旋状のオス・メスパーツからなり、上下の回転移動によって独自の浮遊感とリズムの変化を演出します。実用性や機能性を越えた先にある「遊び」や「行為」といったプリミティブな体験を通じて暮らしを豊かに彩る、この先のプロダクトの提案です。(vertoは「回す」を意味するラテン語)



高本 夏実

1994年京都府生まれ。東京藝術大学デザイン科卒業、同大学院デザイン専攻在籍。自然に内在する普遍的価値を軸に、感情喚起的なツールとしてのプロダクトの在り方を考えています。

HACHINOWA (ハチノワ)



『HACHINOWA』は働く女性のためのシューキーパーです。取引先やアフター6など、TPOに合わせて職場に「置き靴」をする女性にとって、靴の型崩れや臭いは大敵です。殺菌作用のある錫と、除湿・脱臭作用のある杉で構成された『HACHINOWA』は、靴の内側全体を清潔に保ち、8の字型の曲げわっぱが、リボンのような軽やかさと弾力で靴の形を整えてくれます。これからますます増える働く女性達を足元から応援するプロダクトです。



山崎 洵・大沢 拓也

学生時代のインターンシップ先で知り合ったデザインコンビ。互いの長所を生かしながらおももしろいモノづくりを時々しています。

HYOURI (ヒョウリ)



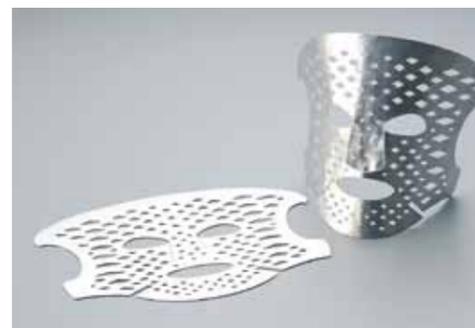
このランブシェード (TypeA、TypeB) は、アルミの発泡材と鋳造面の2種類の異なる加工で、一体的につくられます。アルミ発泡材は溶岩石のようなポーラスな有機的な粗い表情を、アルミ鋳造面は平滑な3次曲面で構成されシャープで無機質な表情をもちます。アルミ発泡材の武骨な塊と、純アルミの平滑な面とは、今までにない振幅のコントラストで、表裏一体に存在します。二つの素材・加工からつくられるこのコントラストは、空間を照らす光には変化を生み、異なる存在感で空間にアクセントをつけます。

塩島 康弘

2009年、法政大学大学院建設工学科建築学専攻卒業。09年から現在、株式会社日建設計に勤務。幅広い業務に携わり、今までに大規模建築から、ランドスケープ、インテリア、展示会デザイン、家具・プロダクトデザインに至るまで、様々なデザインをしています。



錫のフェイスパック



肌を冷やすことで血流を良くして顔を引き締めたり、毛穴を目立たせなくする効果があります。抗菌性・熱伝導率がよく、金属アレルギーの人でも使用できる錫を美容品に活かせるのではないかと考えました。錫の特性でもある柔らかさが顔の凹凸にもピッタリと密着させることができます。市販のフェイスパックの上から冷やした錫を顔に押し当てて冷えた状態をより継続させる効果と、錫の重さによるリラックス効果をもたらす機能を持たせました。寝る前の肌ケアだけでなく、化粧前に使用することで化粧ノリをよくすることも可能です。

関 大地

私は新しい価値を具現化することへの強い情熱を持っています。日本大学芸術学部を卒業後、東京藝術大学大学院に入学と共に、株式会社Takramにインターンとして入社。アート、テクノロジー、クリエイティブの3つの領域を満たすために幅を広げ学んでいる。時代の最先端を生きながら、人間らしさを忘れない、そんなデザイナーを目指しています。



コンペテーマの設定から2次審査までを担った4人の審査員に、
今年度の応募作品とその評価、今後のコンペティションの期待などをお聞きしました。



安積 伸

プロダクトデザイナー／法政大学教授

このコンペには、これまで3回審査員として参加しましたが、今回はとてもレベルが高かった気がします。私が期待していたのは、加工技術をどうデザインに活かしていくかということ。その意味で、富山県産業を真摯に受け止め、それをベースにしながら前へ進めていこうとしている作品が多かったように思います。中でも、とやまデザイン賞を受賞した「ARMADILLO」は、鋳物工場とのコラボレーションによってデザインを完成させた点が素晴らしかった。

新しいビジネスモデルの提案など斬新な切り口の作品を目にすることができたのも今回の特徴でした。審査員をする楽しみの一つは、デザインで興奮できること。久しぶりに興奮できるデザインに出会え幸せな時間を過ごすことができたコンペでした。



プロフィール

京都市立芸術大学卒業後、NECデザインセンター勤務を経て、1994年英国王立美術大学修士課程修了。その後ロンドンを拠点とし95年よりデザインユニット「AZUMI」として活動。2005年に個人事務所「a studio」設立。T-fal(仏)やlapalma(伊)など多くの国際的企業でプロダクトデザインに携わる。FX国際デザイン賞「プロダクトオブサイヤー」(英)をはじめ国内外で数多くの賞を受賞。審査員としてもIF賞(独)などに参加。「LEM」ツールがV&A博物館(英)のパーマネントコレクションに選ばれるなど、各地の美術館に作品が収蔵されている。16年より日本に拠点を移し、法政大学デザイン工学部システムデザイン学科教授に就任。



川上 典李子

デザインジャーナリスト

今回は「富山のコンペに参加する」という皆さんの姿勢や意欲がいつも以上に伝わってきたコンペでした。富山県の産業や企業、素材、加工技術などについてきちんとリサーチもされていて、とても良かったと思います。また「既存の富山」にとどまることなく、「次の富山」を探求していることも伝わってきました。各提案の今後の展開も楽しみです。

「素材」と「加工技術」は、審査員全員が特に期待していた項目でした。1次審査段階の作品シートから2次審査の試作へと進んでいく中で、素材と加工に触れ、皆さんの作品が変化していくその「プロセス」を見ることができたのはとても有意義なことでした。プロダクトとデザインの可能性を、皆さんのプロセスから感じることができたコンペだったと思います。



プロフィール

「AXIS」編集部を経て1994年に独立、企業やデザイナーの取材を行っている。主な著書に「リアライジング・デザイン」(TOTO出版)、共著に「ウラからのぞけばオモテが見える」(佐藤オオキ氏との共著、日経BP)、編書に「天童木工」(美術出版社)など。国際交流基金主催「WA:現代日本のデザインと調和の精神」(2008年~11年6か国で開催)、「現代日本のデザイン100選」(14年~)などデザイン展のキュレーションにも携わる。「第1回ロンドン・デザイン・ビエンナーレ2016」日本公式展示アドバイザー・コミッティー、キュレトリアル・アドバイザー、義塾デザイン研究所非常勤講師、長岡造形大学非常勤講師、首都大学東京大学院特別講師。21_21 DESIGN SIGHT アソシエイト・ディレクター。

リサーチに基づいた柔軟な発想に着目



鈴木 マサル

テキストスタイルデザイナー／東京造形大学教授

「こういうのが出てきて良かったな」と思える作品が幾つもあったコンペでした。デザインは五感をフル稼働させて探り当てていく作業。素材を手で触り、加工の現場に出向き、実物を見て、触って、情報を取りに行くことがとても大事です。人の琴線に触れるデザインは、作り手のある種アナログな行為の積み上げから生まれます。

加工現場とのやり取りの中でデザインが進化していった阿部憲嗣さんの「ARMADILLO」(とやまデザイン賞)を見て、本当にこういう「提案」というか「行動」が出てきて良かったなと思いました。

松下陽亮さんの「Colonial」(準とやまデザイン賞)も、これまで我々が気づけなかった素材の可能性に視点を置いた素晴らしい提案だったと思います。



プロフィール

多摩美術大学卒業後、栗辻博デザイン室に勤務。独立後、2005年からファブリックブランドOTTAIPNUを主催。自身のブランド以外にも、マリメッコ、カンパール、アルフレックスジャパンなど多くのブランドから作品を発表。14年、青山のスパイラルガーデンで個展「鈴木マサル傘展」を開催。15年、北日本新聞の紙面を柄でラッピングする企画「富山もよう」のデザインで第35回新聞広告賞、新聞社企画部門を受賞。16年のミラノサローネに出展したアイシン精機のブースのインスタレーションでMilano Design Award 2016、ベストエンゲージメント賞を受賞。現在、有限会社ウンピアット取締役。東京造形大学教授。



岡 雄一郎

富山県総合デザインセンター
プロジェクトリーダー

1次審査のスケッチを最終的なデザインへとどのように導くのか、またその点を皆さんがどのようにクリアしていくのか、という期待を持っていました。「これは作れないだろう」と思われる作品を1次審査で落としてきたこれまでのコンペと違い、今回は「どのようにしてブラッシュアップするのか」という「プロセス」への期待も含めて選んだ作品も幾つかありました。最終的には、その期待に応えられた作品、課題が残ってしまった作品で評価が分かれたように思います。

大切なのは「プロセス」です。2次審査に残った12作品にはいずれも製品化への可能性が秘められていると思いますので、今後の過程も含めて、デザインセンターとしてしっかりとフォローしていきたいと思っています。



プロフィール

1989年金沢美術工芸大学卒業。1989-1997年、NEC(日本電気株式会社)、1997-2016年、アイシン精機株式会社にてデザイナー、デザイン部長として勤務。2016年デザイン&デザインコンサルタント会社TUG DESIGNを設立。17年4月より富山県総合デザインセンターのプロジェクトリーダーに着任。

妥協しないプロセスがデザインの可能性を拓く

問題解決の糸口は加工の現場にある

25TH ANNIVERSARY SPECIAL EXHIBITION



富山デザインコンペティション 25周年特別展

日時: 2018年11月15日(木)~27日(火)
場所: 富山県美術館 TAD gallery



平成6年(1994)にスタートした「富山デザインコンペティション」が、今年で25周年を迎えました。これを記念して、「25周年特別展」が富山県美術館のTADギャラリーで開催されました。

「富山デザインコンペティション」は、おかげさまで25周年を迎えることができました。多くの方にご応募いただき、ここから多くのデザイナーが育っていきました。思い起こせば、1993年に富山県の産業活性化策を企画する中、当時県内のデザイナーは数えるほどしかおらず、人材の集結を図らねばと思い、コンペティションという手法を導入したのでした。

このコンペが25年の長期に渡り実施されるとは思ってもみませんでした。コンペからは次々と新製品が誕生し、ブランドとして結実しています。デザイナーのポートフォリオに記載されるだけでなく、いまでは日本の産業を支える人材輩出コンペにもなりました。初期の応募者には、母校の大学等で後進の指導にあたっている方々もおられます。大手企業の中核で活躍する方、フリーランスとして得意なデザイン領域に打ち込んでいる方も少なくありません。そして何よりこのコンペの効果は、県内企業がデザイナーの起用方法、デザイナーとの対話(開発スタイル)を習得した点です。このコンペはすべて公開で実施されます。すべての言動がオーディエンスに届く審査方法は、審査員には大変なプレッシャーの様ですが、こうしたオブラートにくるまないコンペは新たな歴史を作り、後発コンペの手本となりました。しかし、これからです。延べ8,000人の応募者、密接な関係構築の下コンペにご協力いただいている250名のデザイナー。この財産を次のクリエイティブ産業に生かすべく、アクションを開始したところです。引き続き、このコンペにご支援・ご協力を賜れば幸いです。

富山県総合デザインセンター 所長 桐山 登士樹

富山デザインコンペティション受賞作品と受賞当時の自分へのメッセージ
受賞当時の自分に今、声をかけるとしたら...

「今、ベランダに置いてあるガーデンチェア EDENを見ながら原稿を書いています。当時は商品化を前提としたデザインコンペはほとんど無かったから富山デザインコンペの企画は嬉しかったね。ご馳走になった富山湾の海の幸も美味しかった!」



林 秀行
Shukoh Hayashi

東京都生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。桑沢デザイン研究所インテリア住宅研究科卒業。近藤康夫デザイン事務所勤務後、林秀行デザイン事務所設立。家具、日用品など日常の身近なアイテムの開発および販売を手掛けている。アルフレックスコンペティション他受賞多数。

EDEN ▶
1994年度とやまデザイン賞受賞作



「デザインの原点を
忘れずに。」と
声をかけたいです。



テーブルカッター ▲
1995年度とやまデザイン賞受賞作



菅野 傑
Suguru Kanno

株式会社サクセスプラン代表
「THE GLASS project」デザインディレクター
「MIKIMOTO 素プロジェクト」ディレクター
「江戸意匠」プロデューサー
「東急ハンズ project」デザインディレクター等。

コンセントタップ ▶
1999年度とやまデザイン賞受賞作



山中 祐一郎
Yuichiro Yamanaka

1972年栃木県生まれ。東京造形大学卒業後、渡英。AA SchoolでShin Egashiraに師事。1995年アフリカとアジアの4つの大河を陸路で巡るグランドツアーを敢行し、帰国後、内藤廣建築設計事務所勤務。99年の富山デザイン賞受賞を契機として独立しS.O.Y.建築環境研究所/S.O.Y.LABO.を設立。建築設計をベースにランドスケープデザインかスマホアプリ開発まで展開。受賞多数。

「今、ミラノから帰って、この先どうやって行こうかと考えていたら、受賞をきっかけに様々な出会いが起り、人生が面白くなるよ。期待してね。」



乾いた傘と濡れた傘と一緒に立てられる傘立て ▶
2000年度とやまデザイン賞受賞作

浅野 泰弘
Yasuhiro Asano

工学院大学建築学科、桑沢デザイン研究所卒業。
株式会社浅野デザイン研究所設立後、渡伊。ドムスアカデミー(ミラノ)修士課程卒業。主にプロダクトデザインを中心に、インテリア、グラフィックと活動領域は多岐にわたる。富山プロダクトデザインコンペグランプリ、富山デザイン賞、グッドデザイン賞他受賞多数。多摩美術大学および桑沢デザイン研究所非常勤講師。



高田 晃一
Koichi Takata



「本授賞式の次の朝、滑って事故ります。4WDだからといって物理を甘く見てはいけません。賞金はこの修理代に消えます。車が好きだから自動車関連の製品を作ってください。」

1973年富山県生まれ。1994年(株)スピリッツに入社し内装施工管理を担当。96年(株)高田製作所に入所しアルミ鋳造に着手。2004年ミラノサローネ出展以来、仏具製造のコア・コンピタンスをデザインの手で発展させ工業化に踏み出す。16年副社長に就任。18年同社ブランド「ALDECOR カーストッパー FLUTE」がグッドデザインを受賞。技術のDNAを未来へ連ぶ45歳の技術者。

ソーベディッシュ(石鹸置き) ▶
2000年度とやまデザイン賞受賞作



「ユニットを結成して間もなく頂けた賞は、まだ駆け出しの私たちにとって、とても励みになりました。当時の勤務先(Ron Arad Associates)で作業をさせてもらったことが懐かしく思い出されます。今でも初心を思い出させてくれる大切な作品です。」



スタジオ・トロイカ
Studio Trojka

スタジオ・トロイカは、丹呉由紀子と鶴丸裕子により、2001年にロンドンにて結成されたプロダクトデザイン・ユニットです。現在は日本と北欧を活動の拠点に、オフィスチェア、木製家具、展覧会向け作品など、様々なプロダクトの製作に携わっています。普遍性を持ちながらも、日常生活を心地よく刺激するものづくりを目指して活動しています。

Round the Clock ▶
2001年度とやまデザイン賞受賞作



「もう少し食欲になっても良いかもね。」



Spiral Hanger ▲
2001年度とやまデザイン賞受賞作
藤原 敬介
Keisuke Fujiwara

1968年東京都生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科卒業後、株式会社スタジオ80入社。2001年同社退社後、ロン・アラッド・アソシエイツインターン。帰国後、藤原敬介デザイン事務所設立。とやまデザイン賞他受賞多数。著者に「インテリアデザイン～美しさを呼び覚ます思考と試行～」「Interior Elements for Space and Product Design」。首都大学東京インダストリアルアート学科教授。



「14年後に想定外の転機が訪れます。かなり悩むと思いますが、自分を信じて是非チャレンジしてください。大きな変化が更なる成長へ導く素晴らしい世界が待っています!」



馬場 威彰
Noriaki Baba

多摩美術デザイン学部卒業。株式会社東芝デザインセンターにてB2CからB2Bまで様々なデザイン開発にたずさわる。同社退社後オムロン株式会社IABのデザイン責任者として従事。オムロン株式会社IAB(インダストリアルオートメーションビジネスカンパニー)商品事業本部企画室デザインGジェネラルマネージャー。

flashbulb ▶
2002年度とやまデザイン賞受賞作



「あんまりとんがらないで。自分には厳しくていいけど、周りの人たちは優しくしてください。他の人の話や意見は一旦は受け入れて身を委ねよう。」



寺田 尚樹
Naoki Terada

1994年ロンドンの英国建築家協会建築学校(AAスクール)ディプロマコース修了。帰国後、建築のほか、ブランドのプロデュース、ディレクションを行う。2003年有限会社テラダデザイナー級建築事務所設立。11年プロダクトブランド「15.0%」「テラダモケイ」を立ち上げ下北沢に寺田模型店を開店。15年「i+」を立ち上げる現在、株式会社インターオフィス代表取締役社長。海外高級家具ブランドの輸入販売も行う。

BULB PLANTER ▶
2003年度とやまデザイン賞受賞作



「ドアストッパー? ちょっとマイナーなジャンルだね...」でも数年後に商品化してもらえるから、ブレずに進みなさい。繰り返した試作製作作業が報われるはず。」



TUBE DOOR STOPPER ▲
2003年度とやまデザイン賞受賞作



渋谷 哲男
Tetsuo Shibuya

主に日常の生活用品、家具、ノベルティ等のデザイン及びデザインディレクション、グラフィックデザイン等を手掛けている。本コンペでは1998年、99年、2003年、06年に入賞。ミラノサローネサテリテ、ストックホルムファニチャーフェア、DESIGNSHANGHAIなど、国内外の展示会出展活動も継続的に行っている。

「言っても聞かなそうなので、敢えて声はかけずに放っておきたいと思います。」



小野 里奈
Rina Ono

仙台生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部生産デザイン学科卒業後、設計事務所勤務などを経て東北芸術工科大学芸術工学研究科修了。同大学プロダクトデザイン学科助手を経て2007年にrinao designを設立。「つくる」ことや「つかう」ことが暮らしに寄り添うように、日本のさまざまな地域の作り手と共にものづくりに取り組んでいます。



DAVIDSON ▶
2004年度とやまデザイン賞受賞作

「受賞に満足することなく、商品化に積極的に取り組もう！」



Hanger-look ▲
2004年度準とやまデザイン賞受賞作



舟橋 慶祐
Keisuke Funahashi

愛知県を拠点とし、伝統工芸からロボットなどの先端機器まで幅広い領域のプロジェクトに携わる。red dot design award, iF DESIGN AWARD、グッドデザイン賞、国際家具デザインコンペティション旭川ブロンズリーフ賞など受賞多数。KEISUKE FUNAHASHI DESIGN 代表。大同大学・名古屋芸術大学非常勤講師。

「受賞当時の自分と、ガチでデザインの勝負をしてみたい。もし、負ければ自分自身の「劣化」だろうし、勝てば順調な「進化」だといえる。」



澄川 伸一
Shinichi Sumikawa

1962年東京生まれ。84年千葉大学工学部卒業。84年よりソニーデザインセンター、ソニーアメリカデザインセンター勤務。92年澄川伸一デザイン事務所設立。3DCAD/3Dプリンターをフル活用した幾何曲面設計を得意とする。2016年はリオデジャネイロオリンピック公式卓球台のデザインが話題となる。ドイツiF賞他受賞多数。大阪芸術大学教授。



機能を持った床 ▶
2005年度とやまデザイン賞受賞作

「作れないものを応募してはならない。賞をもらう資格はない。」



UZU ▲
2006年度審査員特別賞受賞作



南 政宏
Masahiro Minami

主に滋賀県の地域産業や地域資源を対象とし、プロダクト、パッケージ、ブランディングなどをジャンル問わず広く手がけております。地方にも良いものや技術がたくさんありますが、その魅力を引き出し、時代に合った形で再編集し、伝えていくためにデザインが必要であると思います。日本の経済成長とともに失われてしまった地域の独自性をもっと磨いていきたいと考えています。

「過去のことも考えず、未来のことも考えず、今その瞬間を全力で楽しんでもらいたい。あと、必ずお寿司は食べて帰るように(笑)。」



BOUQUET ▶
2005年度準とやまデザイン賞受賞作



大友 学
Gaku Otomo

1978年東京生まれ。デザイン事務所stagio inc.代表。「デザインは目的を具現化するための道具」というスタンスのもと、プロジェクトのプランニングから、プロダクト・グラフィック・パッケージ等のデザインを手がける。必然性を前提とした「モノのありかた」を指向しながらも、デザイン自体が持つ曖昧で感性的な面白みもまた、魅力の軸として活かしていく。スパイスが利きつつ味が整った「捨てる場所がない」クリエイションを志向している。

「受賞おめでとう!夢みただけけど、がんばってほんとにほんとに良かったね。あれからもう12年も経っているけれど、今もつくってもらっているよ。」



KUSA ▶
2006年度とやまデザイン賞受賞作



switch design

大畑友則・瀧ひろみによるデザインユニット。ともに静岡県静岡市出身。多摩美術大学造形表現学部を卒業後、プロダクトデザインを中心に活動しています。生活の中で、使っていて気持ちが楽しくなったり嬉しくなったりするものを目指してデザインに取り組んでいます。商品だけでなく、商品を伝えるためのパッケージ・グラフィック・空間デザインも行っています。

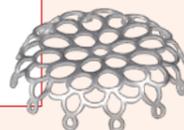
「そこで出会った人、これから出会う人が大きな財産となります。諦めず大切にじっくり育てていってください。」



Salt&Pepper ▶
2007年度とやまデザイン賞受賞作
岡田 心
Shin Okada

1975年愛知県生まれ。名古屋芸術大学美術学部デザイン学科卒業後、自転車メーカー、キッチンメーカー、オフィス家具メーカーを経て2005年にフラップデザインスタジオを設立。印鑑から仏具、食器、提灯、櫃、枡、調理器具など各地の伝統産業や中小企業と共に育てる商品開発を心がけ、さまざまな製品デザインを手がける。13年より、大同大学情報学部情報デザイン学科准教授。

「これから作品を通じて出会う人やモノコトを大切に。いま面白いと思っていることを何かかたちにする機会に出会ったら、思い切ってやってみよう。」



Lotus ▲
2007年度富山プロダクトデザインコンペティション入選作



磯野 梨影
Rie Isono

武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科を卒業後、ソニー(株)デザインセンター、PSD associates Ltd.(英国)を経て、2000年よりPear Design Studioとして活動を開始、現在に至る。多摩美術大学生産デザイン学科非常勤講師。

「グランプリおめでとう。それは素直に喜んでよし!でも、あまり有頂天になり過ぎるなよ…。焦らず冷静に世の中の状況を見極めながら、次なる一手へと投じなさい!これから無理にプロダクトアウトさせていこうとしているようだが、原点に戻りユーザー視線を忘れずに〜。」



ころびたっ ▶
2009年度とやまデザイン賞受賞作



渡辺 仙一郎
Senichiro Watanabe

モノとコトをつくると同時に場をデザインします。Renovation Brand VOLOでは、古さや懐かしさなど建物の眠っている“良さ”を引き出しながら、デザインで新たな価値へと変えていきます。人間・時間・空間すべての“間”には、モノ・コト・バが介在し、それらの呼吸によりライフスタイルが醸成されます。つまりその“間”の精度を高め、それぞれの呼吸を調和させることでデザインのクオリティーを継続させます。

この受賞作品がきっかけとなり、そこからのたくさんの大切な出会いや経験への巡り合いが、今現在の自分を成り立たせていると感じています。



Collinette ▶
2011年度とやまデザイン賞受賞作
松山 祥樹
Yoshiki Matsuyama



1987年生まれ。三菱電機株式会社デザイン研究所にてプロダクトデザイン業務に従事。公共機器や家電製品、途上国の暮らしに向けたソリューションデザインまで、多様な領域の研究開発に取り組んでいる。また並行して行う個人の活動では、伝統工芸や生活雑貨から実験的な自主プロジェクトまで、国内外で様々なプロジェクトを発表。富山プロダクトデザインコンペティション、Lexus Design Award2014他受賞多数。

「食べ過ぎず、飲み過ぎず、健康管理と体重キープに気をつけろ!あと、英語は今すぐ頑張れ!」



TEA SET ▶
2009年度準とやまデザイン賞受賞作



倉本 仁
Jin Kuramoto

1976年兵庫県淡路島生まれ。金沢美術工芸大学を卒業後、家電メーカー勤務を経て、2008年にJIN KURAMOTO STUDIOを設立。プロジェクトのコンセプトやストーリーを明快な造形表現で伝えるアプローチで様々な製品デザイン開発に携わり、国内外のクライアントにデザインを提供。素材や材料を直に触りながら機能や構造の試行錯誤を繰り返す実践的な開発プロセスを重視している。iF DESIGN AWARD、GOOD DESIGN賞など受賞多数。

「学生の頃からトライしてきた富山デザインコンペティション、受賞おめでとう。後にも先にもあの公開審査会での緊張と胃痛は経験しないと思うので…良い経験できたね。」



Slanting mirror ▶
2016年度とやまデザイン賞受賞作



馬淵 晃
Akira Mabuchi

日本大学海洋建築工学科修士課程修了後、設計事務所にて、住宅、商業施設、事務所ビル、都市計画など多岐にわたる設計・管理に従事。2011年に独立し「AKIRA MABUCHI DESIGN」を設立する。建築、インテリア、空間デザインにとどまらず、プロダクトの企画やデザイン、ブランディングなど、素材/空間/人/地域のもつ魅力、背景を引き出し、それらの可能性を築き伝えるために様々な視点をもって活動している。

「よくやった!!」



KU-SEN ▲
2012年度準とやまデザイン賞受賞作



石井 聖己
Seiki Ishii

FUJITSUで情報機器のプロダクトデザインに従事した後、2017年に京都にSEIKI DESIGN STUDIOを立ち上げる。京都を拠点に活動。プロダクトデザインを主体としたデザイン開発を行い、ベンチャーから大手企業、伝統工業まで幅広く手がける。GOOD DESIGN AWARD BEST100他受賞多数。



川上 典李子
Noriko Kawakami

富山デザインコンペティションの審査に参加し、寄せられた多くの提案に目を通していき過程は、デザインの可能性についてそのつと深く考える時間となりました。同時に、本コンペの独自性を改めて実感する時間でもありました。

1994年の第1回開催以来、商品化を前提とするデザインコンペとして、富山デザインコンペティションはデザインの現場に多くの刺激をもたらしてきました。若き才能と企業の出会いの機会を創出し、企業の可能性そのものも拡げています。このコンペを機に開発された製品がすでに多くの人々に愛用されていることも注目すべき点です。

それらの実績にも目を向けながら、25周年となる今年度では、デザインと切り離すことのできない「素材と加工とデザイン」をテーマとしました。結果として富山の企業のリサーチをふまえた意欲的な提案を目にすることができ、富山のデザイン、産業の歴史や歩みと密接な素材と加工の重要性に関する意欲的な提案を選出できました。

大切なのは、生活や社会の変化のなかにおいてデザインの可能性を考え続け、課題に対するアプローチを重ねていく姿勢であり、行動です。この意味からも、広く柔軟な発想を募るデザインコンペの重要性があるのだということ、今回も強く実感しています。また、公開審査を含む厳しい審査でもありますが、日常的な観察眼やリサーチの状況など人間的なアプローチを知ることができる審査であることも本コンペの魅力であると感じています。

このように多様な特色をふまえるほどに、生活、社会と人々の関わりを丁寧に探った意欲的な提案がなされる場としての本コンペの次の展開に注目せずにはられません。

具体性や現実性を伴う提案となるデザインが担っていける役割は幅広くあります。富山県が進める異業種連携、企業間連携等、先進的な枠組みづくりにおけるデザインに関する議論もデザイン提案の募集に活かされていくことでしょう。企業の積極的な姿勢も重要です。デザインの意義や可能性を改めて考え、意見を交わし、実践していく重要な場を育むうえで富山デザインコンペティションの今後にこれまで以上に期待しています。



鈴木 マサル
Masaru Suzuki

私は2015年から今年まで計4回、審査委員として富山デザインコンペティションの審査員を務めさせて頂きました。正直、4回もあの審査会をやってきたのかと思うと、自分で自分を誉めてあげたい気持ちです。というのも、この審査会はファイナリストの公開プレゼンテーション、審査員による公開審査という形で行われます。審査員はまるで試されるかのように聴衆の前にさらされ、こちらの発する一言一言にファイナリスト達が一喜一憂するのです。この緊張感とプレッシャーは筆舌に尽し難く、私は審査会のあとは決まって腹痛に襲われるのが常でした。

そして私は、参加者の皆さんのことがとてもうらやましいと審査のたびに思っていました。最終選考に残るとプロトタイプを作る予算と時間が与えられるわけですが、富山県総合デザインセンターの方々があつ、かなり本気でサポートしています。エントリーした内容に対して様々な検診、アドバイスをし、場合によっては試作するメーカーの紹介まで、きめ細やかな対応をしています。そして、優れた技術を持った富山県のメーカーさん達がそれに応えるように、最終審査時のプロトタイプにしても、審査後に製品として製作する場合でも、これまた誠実に、かなりの熱量を持って対応していました。デザイナーであつたらこの状況をうらやましいと思わないわけがありません。こういった運営体制を知り、今までこのコンペから数々のヒット作が生まれてきた理由をとても良く理解したのです。

今年がちょうど25周年。これだけクオリティーの高い事業を25年間も継続してきたことにも驚きますが、来年度からはこのコンペが更なる展開を目指し、新たなフェーズに入るという話を耳にしました。どのようなスタイルになるにしても、富山県総合デザインセンターやメーカー等、関係者の本気が支えるわけです。どんなことが始動し、どんなものが生まれてくるのか、今から楽しみでなりません。今後、益々の発展を期待しております。



名児耶 秀美
Hideyoshi Nagoya

富山デザインコンペティションとは、日本のプロダクトデザインコンペの草分け的存在であり、富山県総合デザインセンターが主催し、富山県が後援する公的なコンペティションです。プロダクトデザインを志すデザイナーは皆知っているコンペティションだと思います。

2004年から2008年に審査員としてご依頼いただき、5年間審査にかかわらせていただきました。その当時は、元SONYの開発のリーダー的存在だった黒木靖夫さんが富山県総合デザインセンターの所長をされておりました。私が若い時に黒木さんの講演で聞いたウォークマンの開発秘話は、私のデザイン人生に大きな影響を与えてくれました。

黒木さんにお会いした時に、一緒に仕事をさせていただき喜びをお伝えしたところ、「私も少しは役に立っていましたか!」と満面の笑顔で語っていただいたことがついこの間のように感じます。黒木さんを筆頭に、デザインセンターの温かい皆さんが、富山県や日本のデザインの未来を考えたコンペティションだったと記憶しております。

澄川伸一さんのpecon/浅野泰弘さんのSPLASH/大友学さんのGUMHOOK/渋谷哲男さんのTubu DoorStopper/瀧ひろみさん・大畑友則さんのKUSA/小林幹也さんのTate Otama/NIMIさんのfire/AUN2H4のBirds Hook/渡辺仙一郎さんのPITACORO、これら9作品を製品化させていただきました。当初は富山県のメーカーが前向きに商品化を考えてくれない時期がありましたが、デザインバカでモノづくりバカの私が審査員をさせていただきながら、どんどん商品化を進める姿を見て、県内のメーカーが「なんで他県に商品化をとられるのか」とばかりに、皆さんが商品化を進め出してくれたことがとても嬉しく感じました。

これからの日本のモノづくりは、理性(価格、品質等)・感性(デザイン、センス等)・知性(環境、再生、バックストーリー等)や実感・共感・交歓の時代です。そのすべてが相手を思いやる日本らしいデザインが必要な未来です。少しずつ時代と共に変化を楽しみながら進歩する富山デザインコンペティションをいつも応援しています。

interiorlifestyle TOKYO 2018



「富山デザインウェーブ」出展

東京ビッグサイトで開催された国内最大規模のインテリア・デザイン市場の国際見本市「インテリア ライフスタイル」に、「富山デザインウェーブ」が昨年に続き出展しました。

interiorlifestyle TOKYO 2018 開催概要

会 期	2018年 5月30日(水)~6月1日(金)
会 場	東京ビッグサイト(東京国際展示場) 西1・2・3・4ホール+アトリウム
主 催	メッセフランクフルトジャパン(株)
出展者数	810社/29カ国・地域(国内:615社、海外:195社)
来場者数	来場者数:25,456名/42カ国・地域 (国内:24,647名、海外809名)
後 援	経済産業省 独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)他

「インテリア ライフスタイル」は、世界最大級の国際消費財専門見本市「アンビエンテ」(ドイツ・フランクフルト)と、家庭用・業務用テキスタイルの国際見本市「ハイムテキスタイル」(同)の2つを母体とする、国内では最大規模の国際見本市。11月に開催される「IFFT/インテリア ライフスタイル リビング」と並ぶ見本市として、国内外の多くの関係者で賑わう国内屈指のイベントです。

来場者は主に、小売店や百貨店などのバイヤー、デザイン関係者、建設・住宅関連業者、ホテル関係者など。本年度は3日間で2万5千名あまりの来場者が訪れました。

「デザインウェーブ開催委員会(構成団体:富山県、富山市、高岡市)」は、今年で25回目を迎えた富山デザインコンペティションの紹介をはじめ、富山デザインウェーブから生まれた新商品や富山の技を凝縮した「越中富山技のこわけシリーズ」など富山のデザイン商品や活動を広く紹介し、デザイン先進県富山をアピールしました。



カー・デザインのクリエイティビティが、
富山の素材／技術とコラボ。

富山マテリアルワークショップ2018

TOYAMA MATERIAL WORKSHOP 2018

テーマ

存在し続けるマテリアル

さまざまなジャンルで活躍するデザイナーが、富山のものづくりに活用される素材を使い、職人のサポートを受けながら作品を制作する「実践型」のワークショップ。

今年のテーマは、「存在し続けるマテリアル」。ガラスや金属がこの先、どのような形で私たちの身の回りに存在し続けるのか、工芸・工業の両側面からアイデアを構築し、素材の可能性に挑みました。

MATERIAL Case Study マテリアルケーススタディ

今年度の参加者は、日産自動車のカーデザイナーとモデラー、コンセプトカーなどを担当する日産デザインの拠点のひとつであるクリエイティブボックスのデザイナーたち。自動車をはじめとする様々な工業製品の分野で、軽量化・量産性の観点から樹脂などの新素材に置き換えられつつあるガラスと金属。しかしこれらの素材には、他の素材には代え難い独自の「Texture」や「Materiality(物質性)」があります。

工業デザインの最先端に立つ者の目には、これらの素材はどのように映るのか。またこれら素材はこの先、どのような形で私たちの身の回りに存在し続けることができるのか。素材と対話しながら、工芸・工業の両側面からアイデアを構築していきました。

10月25日～26日の2日間にわたり工房スタッフや工芸作家、県総合デザインセンタースタッフのサポートを受けながら制作に取り組み、作品を仕上げました。

協力：富山ガラス工房／高岡市デザイン・工芸センター



参加者の作品と声

デザインから素材を考えていく
カーデザインとは逆の、
素材からデザインを考える、
刺激的なプロジェクトだった。



どのようにでも加工できる樹脂と
比べたときのガラスの不自由さ。
そこにガラスの本物性が
あると感じた。



「これがガラス?!」という
サプライズを提案できるような
作品を生み出したいと思った。



工芸は仕上がったものが
すべてを物語る。
デザインと工芸の違いも
見えてきた。



普段はCADでデザインしている
ことが多いが、ワークショップを通じ、
改めてモノに触れたときの
驚きと喜びを体験できた。



今回のものづくりはやってみないと
分からない一回性の体験。
次にやったら、違うデザインに
なっているかも。



ガラスには
CGで表現できない
密度や屈折、空気感がある。



計算できない、
言うことを聞かない素材。
それゆえの美しさがある。



手づくりの難しさと楽しさを
感じる事ができた。
富山のものづくり環境を
うらやましく思った。



発表・総括

10月26日、2日間にわたる制作を終え完成した作品の発表とワークショップの総括が行われました。最先端の工業技術の世界で仕事する参加者にとって、素材と直接ふれあう今回の体験は新鮮な驚きを与えた様子。大量生産と再現性を前提とする工業製品と、偶然性や一回性、素材の質感が魅力となるアートや工芸。両者の出会いは「多様性」にフォーカスしたこれからのものづくりを考えていくための貴重な機会となりました。

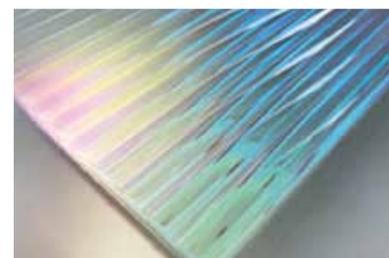


Beyond Glass ガラスの、その先へ。

三芝硝材の硝子技術とクリエイティブボックスのデザイン創造性を掛け合わせ、
富山ガラスの様々な使いかたの研究を通して、ガラスの未来を示す。

強度や耐久性が大幅に向上した機能性ガラスの特性に着目。メーカーの社員や技術担当者とディスカッションを重ねながら、
これまでにないガラス製品の活用方法にアプローチしていきました。

協力: 三芝硝材株式会社



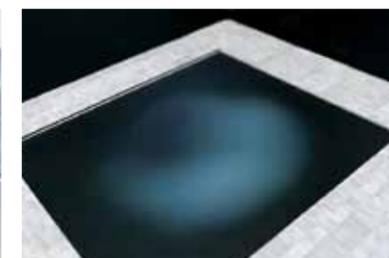
虹彩ガラス

見る角度によって色が変わる「虹彩フィルム」を2枚のガラスの間に挟み込んで、熱圧着したガラスです。表面に凸凹のあるガラスを使用する事で、光に反射して写る影まで美しい文字を作り出すことができます。



立体文字合わせ

2枚のガラスを熱圧着する「合わせガラス」を製作する際に用いる「中間膜」という、接着剤フィルムに加工を施し、虹彩フィルムを挟み込むことで、反射を利用して平面の中に立体的な文字を作り出しています。



自律応答型調光ガラス(温感ガラス)

ガラスとガラスの間に特殊な素材を封入しており、その素材が温度に反応し、自然に乳白色に曇り始めます。温度が下がるとまた透明に戻るという可逆変化を繰り返す「生きたガラス」です。



化学強化ガラス

「薄く、軽く、割れにくい」ガラスの常識を超えたガラスです。「イオン交換」という化学反応を製作手法に用いる事で、ガラス表面の強度を上げる事ができます。非常に薄いガラスの場合、同厚のフロート板ガラスの約15倍の強度を生み出すことができ、熱・曲げ・ゆがみにも強い、理想的なガラスです。



セラミック印刷ガラス

無鉛インクを使用し、ダイレクトにフルカラー印刷を施した、環境に優しく経年変化に強い印刷ガラスです。デジタルデータがあれば、グラフィックや写真など様々なものを印刷できます。ガラスという透明素材なのに、印刷時に白ベースを必要とせず透過も抑えられる技術により、両面から柄を確認することができます。



スクリーン用ガラス

(商品名:madras マドラス/ECOSAT SCREEN エコサットスクリーン)
イタリア製の薬品エッチングガラスであり、表面をマットに仕上げる加工が施してあることにより、スクリーンの投影を可能にしています。またホワイトボードとしても使用できます。

TOYAMA D'DAYS TOURS

とやまD'DAYSツアー

日時:2018年10月4日(木)

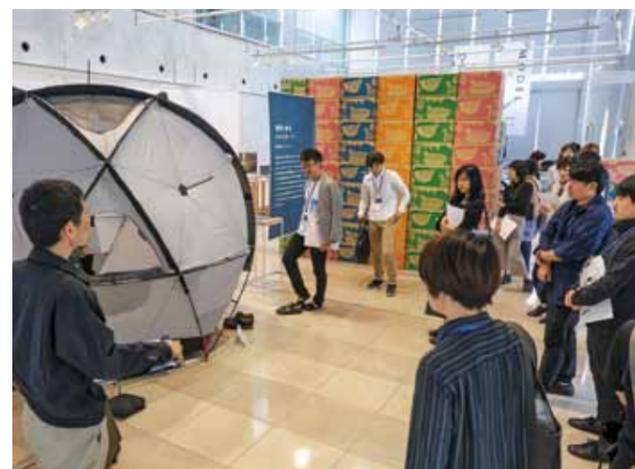
富山県の主催で初の開催となった「とやまD'DAYS(ディー・デイズ)」。富山県のものづくりやデザインへの取り組みを紹介するとともに、デザインに関わる人々の交流を目的に、8月27日から10月10日にかけて様々な催し物が富山県総合デザインセンターを中心に行われました。その一つとして開催された「とやまD'DAYSツアー」。参加者は県内の先進的なものづくり企業や研究機関をめぐり、それぞれのデザインへの取り組みやテクノロジー開発などを見学しました。

SCHEDULE

9:50	富山県民会館 集合・受付
10:00	富山駅 集合・受付
10:45	高岡駅 集合・受付
11:00	新高岡駅 集合・受付
11:30	富山県総合デザインセンター、とやまD'DAYS2018展 観覧 [企画展、センター施設設備の見学]
12:00	株式会社ウイン・ディー [施設設備の見学]
12:30	株式会社能作 [12:30 昼食/13:00 錫・真鍮鋳物場・仕上場などの見学]
14:20	株式会社ゴールドウイン [ゴールドウイン テック・ラボなどの見学]
15:55	富山ものづくり研究開発センター [施設設備の見学]
17:10	高岡駅 下車
17:20	新高岡駅 下車
17:40	富山県総合デザインセンター 下車
18:30	富山駅 下車・解散

富山県総合デザインセンター とやまD'DAYS2018 企画展「気づきとデザイン」

富山県総合デザインセンターは「デザイン」をキーワードに①商品開発、②人材育成、③情報発信という3つの軸で県内産業と地域活性化を支援する、公設の試験研究機関。この日は展示室で「とやまD'DAYS2018」の企画展「気づきとデザイン」が開催中。富山に集積される「技術」「知恵」「素材」「風土」を新しい視点から再発見しイノベーションにつなげていく「工芸ハッカソン」や「富山もようプロジェクト」など、富山にゆかりのある企業やプロジェクト事例を見学しました。



株式会社ウイン・ディー

モックアップ製作で世界屈指の技術を誇る日南グループの北陸中部地域の製造拠点。富山県総合デザインセンターに隣接する当社では、自動車や情報家電など様々な産業界からの依頼を受け、製品デザインからモックアップ製作までのトータルな技術支援を行っています。マシニングセンターや非接触三次元測定器などの設備を完備した工場に足を運び、同社の先進的な製作現場を見て回りました。



株式会社能作

能作は1916年創業の鋳物メーカー。錫100%の器「KAGO」シリーズなどで知られ、近年ではテーブルウェアやインテリア雑貨、医療器具など新分野への進出も果たしています。創業100年を記して建設された新社屋を訪れた一行は、鋳造から仕上げまでの製作工程を見学。同社のものでづくりに触れました。



株式会社ゴールドウイン

世界的なトップブランドを手がけるスポーツアパレルメーカー。その創業の地となる富山県小矢部市に、2017年に開設された「ゴールドウイン テック・ラボ」では、人工気象室やモーションキャプチャ等の最新設備を用いた様々な研究や新商品開発が行われています。ツアー一行は、ラボを中心に展開される最先端のものづくりを見学しました。

富山県ものづくり研究開発センター

公設の試験研究機関である同センターには、研究開発から製品試作、機能評価まで、製品化に必要な一連の設備を完備。「高機能素材ラボ」、「デジタルものづくりラボ」、「製品機能評価ラボ」、「セルロースナノファイバー製品実証・試験拠点」などが設けられ、一連の研究開発を幅広く支援しています。一行は、積層造形システムや10m法電波暗室など、最新の試作・性能評価設備を活用する、産官学による研究開発の現場を視察しました。



EVENT

富山から発信するクリエイティブの新しい波

富山県内のデザイン関連イベント

「富山デザインウェーブ2018デザイン展」の開催に前後して、富山県内では富山市・高岡市を中心に、デザインに関するさまざまなイベントが開催されました。時代をリードするデザインや、伝統に根ざしつつ現代のライフスタイルとのマッチングを志向するクラフトなどの作品に触れようと、県内外から多くの人々が集いました。

■ 工芸都市高岡2018クラフト展

会期／9月21日(金)～25日(火)
場所／大和高岡店4F催事場



針金のスツール

全国的にも珍しい、素材や用途を問わない総合コンペ「高岡クラフトコンペティション」の入選・入賞作品が一堂に展示され、お気に入りの作品を購入することもできる展示会として人気を博しています。コンペでグランプリに選出された宮田雄介氏(千葉県)の「針金のスツール」をはじめ、本年度の応募点数1,033点の中から入選・入賞した439点の金属、漆、ガラス、テキスタイル、家具など、様々な分野の優れた作品が展示されました。



■ 富山デザインフェア2018

会期／9月28日(金)～30日(日)
場所／富山市民プラザ
デザインサロン富山



今年で22回目となる「富山デザインフェア2018」が、富山市内の会場で3日間にわたって開催されました。デザイナーを志す学生を対象にしたデザインスクールや著名デザイナーによるデザインセミナー、全国の学生を対象としたパッケージデザインコンペが開催された他、県内の企業・クリエイターや日本トップクラスのクリエイターによるパッケージデザイン、広告、ポスター、ディスプレイなど、商業デザイン分野の作品が数多く展示されました。



■ 第58回富山県デザイン展

会期／11月9日(金)～11日(日)
場所／富山市民プラザ2Fギャラリー
アトリウム



森記念秋水美術館

今年で58回目を迎えた県内公募展の草分けとなるイベント。建築・環境、インテリア・ディスプレイ、グラフィック、工業デザイン、クラフト・ファッション、デジタルコンテンツなど多彩なジャンルの作品が展示されました。招待審査員に芦沢啓治氏、角田陽太氏、平野湊太郎氏を迎えた審査会では、富山県知事賞に(株)三四五建築研究所の「森記念秋水美術館」を選出。学生大賞には鳥野見遥香氏(富山デザイン・ビューティー専門学校)の作品「強く輝く女性II」が、学生建築デザインコンペでは若月るり氏(金沢工業大学大学院)の「すさま風のかい」が最優秀賞に輝きました。

● 高岡クラフト市場街

会期／9月21日(金)～24日(月・祝)
場所／山町筋を中心として、
高岡駅周辺、御旅屋通りなど



富山県高岡市の中心市街地に於いて開催される、クラフトに関する総合イベント。「観る」「買う」「体験する」「食べる」をキーワードに、作家によるクラフト作品、地場のものづくり、地場の食材を満喫できる多彩な催しが行われました。

● ミラレ金屋町

会期／9月22日(土)～23日(日)
場所／金屋町石畳通り周辺



2008年度から開催してきた「金屋町楽市inさまのこ」の後継として始まった、金屋町の魅力を「見て、知って、体験する」イベント。風情ある街並みを舞台に、工芸品の展示や茶会など多彩な催し物が行われました。

● 銅器団地オープンファクトリー

会期／9月22日(土)
場所／戸出銅器団地エリア



高岡銅器の技術を広く一般に公開するイベント。昨年へ続き2回目の開催。来場者は銅器団地の各会社の製作現場を見学。400年の伝統の技に触れました。

● 日本遺産サミットin高岡

会期／9月22日(土)～23日(日)
場所／生涯学習センターを中心として、
金屋町、山町筋など



文化庁から「日本遺産」として認定された全国の団体が集う「日本遺産サミット」。67団体が集まりそれぞれの魅力をPRしました。シンポジウム、認定地域を紹介する展示コーナー、日本遺産を体験できるワークショップなどが行われたほか、各地の食文化を体験できるグルメコーナーなども設けられました。



富山で生まれる、次のデザイン。

toyama design wave

発行日	2019年2月1日発行
編集・発行	デザインウエーブ開催委員会
事務局	富山県総合デザインセンター 〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 TEL.0766-62-0510 FAX.0766-63-6830 ホームページ http://dw.toyamadesign.jp/
主催	デザインウエーブ開催委員会(富山県、富山市、高岡市)
共催	(株)富山県産業高度化センター (一財)富山県産業創造センター、(公社)富山県デザイン協会
後援	経済産業省中部経済産業局、(公財)日本デザイン振興会、 (公社)日本インダストリアルデザイナー協会、 (公財)富山県新世紀産業機構、 (独法)日本貿易振興機構 富山貿易情報センター、 北日本新聞社、富山新聞社、読売新聞北陸支社、 中日新聞富山支局、日本経済新聞社富山支局、日刊工業新聞社富山支局、 朝日新聞富山総局、毎日新聞富山支局、 富山放送局 、 北日本放送、富山テレビ放送、チューリップテレビ、富山エフエム放送、 (一社)富山県アルミ産業協会、富山県プラスチック工業会、 富山・ミラノデザイン交流倶楽部、高岡商工会議所
監修	桐山登士樹
編集・構成	大矢寿雄／仁木久司／岡雄一郎／五十嵐瞳／竹下知之／窪英明／ 堂本拓哉／吉田絵美／平野尊治／玄千賀子
クリエイティブディレクター	加藤嘉一郎
デザイン	水巻さゆり
ライター	中谷裕也
撮影	道林伸一／本田万里
印刷・製本	とうざわ印刷工業(株)